

昭和三十四年七月二十三日発行  
三種郵便物認可  
(毎月一回・十五日発行)

(通第一七〇号)

# 慈光

第十五卷

第六号

## 目次

『教行信証』信楽釈(二)……………	近・角常観……………(1)
往生の人々……………	福島政雄……………(7)
(特に柳川重行君を想う)	
禅と念仏……………	榊原徳草……………(10)
教えられることども……………	花田正夫……………(14)
みちひとすじ……………	山内すす……………(19)

信楽釈 (二)

で前々席でも申す如く、親の手織りの証は分るも、それは唯理屈だけで、心に真に分る人は甚だ稀であつた。喩えはここに薬があつて極上等の薬である。他の薬では助からぬ病人に効く肺病の妙薬である。其の薬を頂いて

「成る程これはよき薬である。俺はまだ肺病にならぬも、今飲んだら定めてよく利くであろう」と飲むのでは、飲んで折角の妙薬の効能が更に顕われぬ。それでは「五逆十悪の者が助かる念仏故、況んや善い者が飲んだらなお救わるであろう」と飲むのである。又それだけ利く肺病の妙薬と聞いても、自分が真にその病氣に罹つてると思わぬ中は、結構な薬と眺めて居るばかりで、真に其の薬を買う事せず、飲むことをせぬ、それは何故であるか、ここが実に親鸞聖人と他師との違いなのであります。

親鸞聖人のお示し下さる処はどうかというに、斯く折角の法然聖人の専修念仏の御教化も、聞く人の間違いで、「念仏は親が態々作りて下された一枚の手織り故、これを着んならん〜」

を着たあと〜皆壞わして来たては無いか、そんなこと出来る汝ならば、親は態々苦勞してこの一枚の手織りをこさえはして下さらぬ。外の着物が着れぬ汝なればこそ、親は長々心配して、その汝の為に此の一枚の手織りを作り上げて下さるのである。

又薬にしても、汝、肺の妙薬結構である。今のうちに飲もう、などと何言つて居るのであるか。汝は今自分が現に肺病にかかつて居る事を知らぬもの故、そんなことを言つてるのであるけれども、汝は疾くから肺病にかかつて居るのであるぞ」

と、ここを力強くお示し下されたのが親鸞聖人の御教化であります。

で、これを知らされると、今まで言つて居つた事は皆間違ひである。今日までは他の着物でもまだ着られる氣があるから、有る着物なら着てもよからう、など、思つたのであるけれども、他が着れぬ奴故、親が態々手織りをこさえて下さるのである。外の薬も飲むが、念仏は最上の薬と聞く故、これも飲むという位なら、親はこの一服の薬を作りはせぬ。

「汝は不治の病症にて、他の薬ではとてもなおらぬ重病人であるぞ。その為汝が遂に仆れて死ぬのが不憐で堪えられぬ故、その汝に飲ませようと、長々苦心して作り出した

という点に力をいれて仕舞い、肝腎の

「そのして見よう無き者のために御成就下された唯一の念仏」

という遣る瀬無き念仏の哀れみという方が無になりて仕舞うた。

そこで親鸞聖人のお示し下さるは

「外のことはない。汝斯く親の手織りを頂きながら他人の着物を羨み、他の着物も着て見度いなど思うは何故であるか。又この妙薬を頂きながら、此薬を人ごとの如く考へ、自分も今の中に飲んだらなどとゆつくりした考を起しているは何故であるか。唯一言である。汝は先ず汝の身の上を思つて見よ。汝全体自分で華美なる着物を着られる人間と思つてるもの故、矢張り善い着物着たいという考がしりぞかぬ。親の手織の南無阿弥陀仏を称えつつ、なお外の着物が着たいと云う根性の退かぬのは、自分はまた外の着物が着られる人間だとの思いが退かぬ故である。汝が外のが着れる位なら、何故仏は態々手織りの着物を作るものか。汝は外の着物は着れぬ身なのである。その証拠には今迄外の

るこの一服の薬である。そのして見よう無き乱暴人に纏わせ度いと思へばこそ、我は長々心配して、わが慈悲親切で固め出したる、この一枚の手織りなるに、汝はまだ他の着物も着れる自分である、まだそれ程の重病人で無いなどと身の程を知らぬにも程がある」

と。この親心の遣る瀬なき処に気がつく、他の着物を着、他の薬を飲むと思う氣が最早無くなり、今日まで他の着物を着度いなど思つたは「全く身の程知らぬ間違ひであつた、このして見様なき重病人に對しその遣る瀬無き親様のお心であつたか」と頂かれるのであります。

なおこの処で「汝は他の着物の着られぬ者である、不治の病人である」と、唯突き放さるるだけならば、唯苦しむだけでありませぬけれども「そのして見よう無き者なればこそ、茲に親が汝に着させる為、手織りを用意して置いてやつたのである。他の薬では直らぬ病氣なればこそ、この一服の薬を与えるというのである」と、……即ち聖人のお示しには

『極悪最下の衆生のために、極善最上の法をとく』

その「他の着物の着られぬ者に着せたい。他の薬で助からぬ者に飲ませたい」とある薬がこの本願醍醐の妙薬なのである。で、この親の親切なる妙薬のお心を頂けば、ここで

初めてそのお薬が頂かれ、真の罪惡錮もここに生じ、専修念仏の真の味もここで出て来るのである。その故はこの大悲深重の薬のお心を聞かされて見れば、他の薬では到底助からぬ私であつたのである。これを『歎異鈔』の御示していただければ。

『親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にうまるとなねにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずせうろう。そのゆえは、自余の行をばけみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わめ、いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。』

で、しからばその妙薬が果してこの重病人に利くか否か、そんなことは最早聞かなくてもよいのである。この到底して見ようなき重病人に飲ませる為に、親がわざと苦心して下されたそのお薬と頂けば、この薬が利く利かぬは最早問題でない。こちらはどの着物も着られぬ者であつたのである、然るにその着られぬ者に、この手織りを着せて助け

を得度い／＼と言わるるも、要するにこの親の手織りを着度い／＼と言わるるのであるが、これを着るは「この手織りは、如何な乱暴者にも破られず、如何程汗かいても汚されぬ金剛堅固の手織りである。故にこれを着んならん／＼」と力みて着られる手織りでは無い。ここは仏のお慈悲は皆さんの思うて居られるよりも、もつと／＼崇高く、我々は一つとして善く出来ぬ極悪深重の者である。当り前の着物が着られる人間では無いのに、その者をことに哀んで、そのして見よう無き者を、我が助ける、とお作り下された手織りである。その他の着物きられぬ者のために、それを哀みて、大悲の思いやるせなく、態々御成就下されたる超世無上の本願である。世間の上でも、勲功立てた者に朝廷より褒賞を賜わる場合は法規上のことである。処が陛下より民百姓の災難に罹れる者を哀みて、これに救恤を下さるという段になると、「難儀して居る者程亦々不愍である。食われぬ者程益々可哀想である」と、食われぬ者、仕て見よう無き者のために、特に勅使を垂れ、勅使を下さるのにて、普通の場合の法規上の論功行賞を超越して居る。その如く、今阿弥陀仏の本師法皇より本願を下さるの、取りも直さず、諸仏の本願をば飛び越えて、如何ともして見よう無き者に、この我が本願の親心を屈けて、その者救うてやり度いとお慈悲である。

たいとの親の御親切、お慈悲のみが有難いのであります。で、親のまこと、というは、この有難きまこと、葉というはこれ程の貴きお薬であつたのである。ここの処の親の御親切、思召しの程を聞かされて見ると、何人も「私が悪う御座いました。して見ようなき私の浅間しきを、それ程までに思召し下さるお慈悲なるか」と項かして貰わずには居られぬ。その頂けるは、斯く私の悪しきの程を遣る瀬なく仏の方より先知り抜き、其の者を捨てぬとの広大のお慈悲の故に頂かれるのであります。

○  
なお今いう手織りの喩えは、色々の場合に当てはまる。以上は主として、親の手織りの念仏しながら、親の御真意が頂けぬもの故、外の着物に思いが残る間違ひにつき申したのであります。その外、或は念仏しつつ現世を祈る心が起りたり、或は念仏を称えて修行を仕度い、或は念仏を称えるのが修養のように思うて称える者等色々ある。これ皆同じ事にて、親の手織りは外の着物の着られぬ者に、この一枚の手織りを着せて助け度い、との切なるお慈悲なることに気がつかぬからであります。

で、信仰上気をつけなくてはならぬ処に二つある。今のは親の手織りの遣る瀬無きお心を頂いて、真にわが身の悪しきの知れる方につき、申したのである。で皆さんが信仰であるから、我々罪惡深重のして見よう無き者に於いては「天にも地にもして見ようなきに、実にこの広大のお慈悲ましませばこそである。この浅間しき根性の底を知り抜きて斯くまでの広大のお慈悲をお起し下されたことの有難や」と。

それ故、人生、家庭、社会、政治、実業、すべての事はその根本をここに立てぬと、本当のことは出来ぬのである。何故なれば、我々この仏のお慈悲を頂いた広大な味いより云う時は、我々がこの世で、位置財産を争い、名譽を取合ひ、五分五分でやつて居るのが、大なる間違ひにて、その者が私が「悪う御座いました」と、遣る瀬なきこのお慈悲に気がついた一念には、このたびは、このお慈悲の上より、やらせて頂くことが出来るのである。即ちこの世の「漁すなどり」する上にも、このお慈悲を頂いて、やらせて貰う事が出来るのであります。

○  
さて其処で、此のたびは反対に、私が親の手織りを着たとする。処が今言う如く、この南無阿弥陀仏の親の手織りは大悲の仏が、私を遣る瀬なく思召し下さるお慈悲の塊りとなる。この六字は、陛下より窮民に賜わる御見舞の如く、真に我々を哀れと、遣る瀬なき血潮で紋り上げ、織り上げて下された一枚の手織りとなる。

で、此の度は一寸遠慮心を起し、「あゝ有難い、親の手織りである。これを粗末にしてはならぬ、これを大事にしなればならぬ」と、今度は遠慮するようになる。

でここでややもすると「今迄政治、実業に一身を忘れて居つたは如何にも浅間しきことであつた。今後は止めよう」という事になる。これでは前席に云う「内外、明暗を簡はず、皆真実をもちうる」にはなつて居らぬのである。

成る程、我々が「漁すなどり」をするは善くないが、仏の仰せは「それをしてならぬ」で無く、又「してよい」と仰せられるのでも無い。「その浅間しきしてならぬことをする者が真に可哀想じや」と、その者のために、それを救うと御成就下された本願故に、他の着物ではよごして仕舞う汗かきの乱暴者に着せると、こしらえて下された手織り故に、汗をつけてはならぬと、汗の出る乱暴者が骨折るのでは無い。我々は其者々々の因縁に従つて、或は襪をするあり、百姓するあり、奉公するあり、乃至、政治、実業、学問するあり、身分に応じて色々ある。がその業因に従つて色々な事をする汗かきの乱暴者が、南無阿弥陀仏、々々と、その儘となえるように、遅りに扱んで御成就下された南無阿弥陀仏の手織りである。故に手織成就のお心が真に頂けたら「私如きが着て汗をつけてはならぬ」とあとさがりするでは無い。『御文』の中にも

「偶、淨信を獲ば、是の心顛倒せず、是の心虚偽ならず、  
ここを以て極悪深重の衆生、大慶喜心を得て、諸の聖尊  
の重愛を獲るなり」

その五逆、十悪の者のために、態々善知識なる使いを立て、手織りの遺る瀬なき御苦勞をお知らせ下さるは「ひとえに親鸞一人がためなりけり」……この広大のお慈悲は一人のものとして頂かれるのである。斯くして我々の日常生活は、如何にするも罪悪の生活なれども、その生活上に、その者を見捨てぬとの、南無阿弥陀仏のお慈悲頂きた有様は、真に仏の真実を須いさせて貰うものである。で「次いで弥勒の如し」ともお示し下され、又「即ちこれ仏性を得たる者」とも仰せられ、又「是心是仏じや」ともお知らせ下さるのである。実に我々の罪の深き斯くの如くである処へ、この広大のお慈悲を頂くため、我々の罪の心滅び、浅間しき根性の根が切れ、

悩煩具足と信知して、本願力に乗ずれば  
すなわち穢身すてはてて、法性常樂証せしむ。

である。実に我々は何処までも低く、お慈悲は飽くまでも高く、心中は落ち心地で奈落の底まで落ち込み、その者が大悲の願船に乗じて光明の広海に浮ばせて貰うのである。今日はこれより信仰談話会に移ると致します。

(夏季求道会第四日第二席)

かゝる浅間しき罪業にのみ、朝夕まどいぬる我等ごとき  
のいたずらものを、たすけんと誓ひます弥陀如来の  
本願にてましますぞと、ふかく信じて……。

とある仰せ故、斯くの如き者を真にお見捨て無にお慈悲と頂けば「内外、明暗を簡はず」である。即ち在家も出家も政治家も教育者も実業家も、凡そ人間という人間は、皆穢れ果てたる汗だらけの悪業煩惱の者なるに、其の者に着せんと、態々汗にもよごれず、火にも焼けざる手織りを作り出して下されたる、広大の南無阿弥陀仏の念仏である。

で、その有難き広大の思召しの程を頂き、内外明暗を簡はず、南無阿弥陀仏、々々と喜ばせて貰うのが、その手織りを頂いた味であります。故にここは実に肝要のところにて、他力を頂きたる味いは、実に自分の罪深き事、地獄の底までも我が身が墮ちられるのである。故にこの罪業深重、五逆十悪、地獄一定を洩るる者は一人も無い。それ故、今席の「信樂積」の先程申した次の処には

「然るに無始より己来、一切の群生海、無明海に流転し、  
諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂な  
く、法爾として真実の信樂無し」

と仰せらるのである。そのかわり、其浅間しきを捨て給わぬ御慈悲の力強きをお示し下さる段になると『信卷』の初めに

### 一味の雨

おなじこと 一味の雨のふりぬれば 草木も人も仏とぞ  
なる。 源信 僧都

もろともに 一味の雨はかかれども 松はみどりに藤は  
むらさき。 読人 不知

### 水鳥の歌

水鳥の水に入れども羽もぬれず 海の魚とて塩にそまは  
や。

水鳥のゆくもかえるも道たえて みちなきみちをたのし  
みとする。

# 往生の人々

(特に柳川重行君を想う)

福島政雄

人の世に生きて老年にまで達すれば、父母を始め色々の人の死に逢う。人生は実に淋しく悲しいと感ずる。足利浄円先生は此の世が淋しくなればお浄土が賑かになると言つて下さつたことがある。そのお言葉は本当であるが、併し此の世で親しんだ人がお先に浄土に往かるれば、此の世に残つた者は何と言つても淋しく悲しいのである。

近角先生や臼杵先生は私を浄土の教でお育て下さつた方々である。その追憶はなつかしい。亡き父も母も、先立つて死んだ子供も、実に無限のおもいをさそう。併し今私が考えているのは柳川重行君のことである。柳川君の追憶には人間柳川から仏教の人柳川への転向が実に感深いのである。

柳川君は石川県大聖寺の出身である。私をはじめて君を知つたのは、君が小学教員をやめてあらためて広島高等師範学校に入学してからのことである。からだが弱くて健康がすぐれなかつた柳川君は高等師範を僅か二年ばかりで退学してまた小学教員になつた。その頃から私はよほど君

に親しくなつた。それは「渾沌」という雑誌を松本義徳君と柳川君とで出し始めて、私が殆んど毎号執筆するようになつてからのことである。

柳川君は家庭的に不幸な人であつた。君のお父さんはお母さんを棄てて家を出て去り、お母さんはお父さんを呪いつつ死んで行かれたということである。その事が柳川君の心に深く染み込んで、君もまたお父さんを呪う人となつていた。その頃の君は社会主義に共鳴して大杉栄氏の著書などに親しんでいた。しかも母親を亡くして父親に別れているに淋しさは、恋愛の結婚によつて慰められるということになつた。君は殆んどいのちがけのようにして愛子さんと結婚したようであつた。併し妻は妻であつて親ではない。結婚生活の中でも親の無い淋しさは、どうにもならなかつたようである。その淋しさに迷ひに迷うてというのか、君は激しい三角闘争に陥つた。郷里の方の小学校に就職していた君は同じ処で小学教員をしていた女性に対して激しいあこがれを感じ、その女性の眼が星のように見え、夜の空の星

を仰げばその女性の眼が見えて来たということ、殆んど狂乱するばかりの恋であつたようである。

此の時君の妻愛子さんの態度はなかなか宜しかつた。少しも嫉妬せず、折を見てあの人に逢つておいでなさいと言つていた。柳川君を母親代りになつて育てられた叔母さんは、その愛子さんの態度をもどかしく思つて居られた。併し柳川君の狂恋は遂に相手と一緒に夏休に浅間山に登つてその噴火口に身を投げて心中しようと約束するまでに進んだ。

これはいけない、と自らも感じたのであろうか、その縁の糸をたち切るようにして大阪に出て小学校に奉職した。そしてその後の柳川君は少しづつ落着いて行つた。二人の娘達が生れて来てからは家庭が君のために唯一の楽しい場所になつた。私はよく大阪に行つては柳川君の家に泊めてもらつたが、お酒を楽しむ人であつた君は夕食には御飯をたべずにお肴と酒ばかりで好い機嫌になると「うちの嫁さんを見て下さい」などと言つて心から楽しそうであつた。

こんな家庭の楽しみがあつても柳川君の胸中はやはり非常に淋しかつたようである。親を求むる淋しさであつた。渾沌社の主催で法隆寺の夏季求道会を催すようになって、佐伯定胤殿下のお導きを受けようになり、君はその世話役として熱心に立ち回らたとき、足利浄円先生からは章駄天

という異名をいただいたりした。佐伯殿下からは非常に可愛がられて、殿下との親しみが加わるにつけて、殿下を父親のように感じたのたろう。「父親というものはこんなものか」と私に言つたこともあつた。併し殿下はお師匠様であり父親ではないので君はまだ本當の落着を得なかつた。

併しながら法隆寺を中心として求道十年の間に仏陀の親心が次第々に柳川君の胸に染み込んで来た。そして呪つていた生みの父親に対する心持が變つて来た。遂にお父さんと二人で法隆寺にお参りをするようになった。そして私に対して「やっぱり親でなければなりません」と言うようになった。私はその言葉を聞いて心から嬉しかつた。

それからの柳川君は全く仏陀の真実心をいたたく人となり、仏教の求道者となつた。君は随分無遠慮に自分の心持を言う人であつたので、或る時などは私について来て私の講話をきいて「今日の先生の講話は卑しくさえ感ぜられた」などと鋭い批評をしてくれたこともあつた。仏陀の御教を言外に感ずるといふ風で「足利先生のお宅へ行けば御家の隅々まで仏法が染み込んでいるので、特に仏法のお話をきかないでも仏法が感ぜられる」と言つたことなどもあつた。

仏法者となつた柳川君は二人の娘を心から愛するようになった。お酒を飲んで機嫌よくなつていふ言葉が變つて「うちの娘らを見て下さい」と言うようになった。そして

道子ちゃんと言子ちゃんを無限に可愛がつていた。

昭和十六年の春、私が満州の建国大学に赴任することになつて、大阪にお別れに行つた時に柳川君は非常に淋しがつた。そして恰度一緒においで下さつた臼杵祖山先生をつかまえて、「どうぞ今後は一年に一度づつ此の大阪にお出で下さるようにな」と心から臼杵先生にお願ひしていた君の姿は今なお目の前に見るよう感ぜられる。

此のように君は純情の人で、仏教によつてその純情が正しいものになつたのである。小学の先生としても君は小学の子供らと遊ぶと云ふことを心から楽しんでゐた。そして一方ではなかなかの読書家であつた。校長になつてからも「一人ぐらゐは読書家の校長がいても宜しいだらう」と言つていた。

併し校長になつたことは君にとつては致命的であつたと思われる。元來虚弱なからだに非常な無理であつたと思ふ。昭和十八年の春、思いもかけぬ君の急死は私もすべて沈痛な感じを惹き起した。なぜ死んだのだらうと思ひ迷わずには居られなかつた。そして皆の心は深く柳川君の死を惜んだ。私はそれから半年の後新京を引きはらつて京都に転居して来たのであるから「柳川君はなぜ半年待つてくれなかつたらう」と愚痴の思を起さずにはいられなかつた。

## 禅 と 念 仏

仏とは覺者であり、吾々は迷える者である。仏教とは覺れる者から吾々迷える者への教であつて、仏法とは仏の覺りの内容、仏道とはその実践である。仏法を学び、仏道を修行する、この教の中に大別して、聖道門と浄土門とがある。

禅は聖道門であり、普通仏教的には「信・解・行・証」の道を辿つて覺者になるが、浄土門、浄土真宗は親鸞聖人の教によつて仏の大悲を信受して浄土の道をわがものにするることになる。ここには「教・行・信・証」の道が開かれてゐる。この聖・浄二門ともに一括して、仏・法・僧の三宝に帰依することが眼目となるのである。

吾々が仏法を聞き仏道を実践して一個の人生觀、世界觀を得るためには、覺れる者、即ち「人」を通じて覺りの内容を手に入れねばならぬ。迷える「人」が、迷いのままで覺りそのものなる仏法に、対決すると、迷いの範圍内でしか受容し得ないものである。「群盲象を撫す」の譬はよく身に應えることである。仏法は覺者に聞いて手に容るもの、人を通じてこそ人に道が開けてくる。この人に遭うことが

君は私と煩惱の同氣相感するところがあつた。性格の一面に似たところがあつたのである。併し一方ではまた非常に私とちがつた一面を持つていた。人と出合つて咄嗟の間に相手を喜ばせる言葉が直に出ると云う風であつた。私は人に対して日常の挨拶もろくに出来ないという有様なので柳川君のこの美点は羨しいほどであつた。或る年の夏一緒に阿蘇山に登つたことがでる。その登山バスの中で君はバスガールに愉快な話をしかけて同乗の人々を非常に喜ばせたことがあつた。それで無愛想な私は柳川君と一緒に歩けば誰に出会つても氣樂であつた。

おもえば柳川君が世を去つて既に二十年、終戦後今日に至る殺風景な教育会を見るにつけ、柳川君のような純真の教育者が一人でも居たらばと思わずには居られない。有るは無く亡きは數そう世の中に生きていて、お浄土は賑かになると考へても此の世は実に淋しい。往生の人々を追憶する私の心は、その人々を尽十方の無碍の光明に一味になつて居られるとは感じながら、それでも淋しい心の愚痴はどうにもならない。人間急々として衆務を営みながらも、辿り行く道はただ念仏一つの道である。そこに私の残れる人生の一步々々の歩みがあるばかりである。

(昭和三十八年五月五日稿)

## 榊 原 徳 草

大切であるが、これは吾々迷者の探索では不可能であつて見定めがつかない。といつて、それしか求道の方法はない。よき縁に偶然遭うことを祈つて真劍に求むる外にならぬ。しかしよくしたもので、真実求道の精神を發してやつてゐると不思議に、よきひとに出会うものである。

禅に曹洞禅、臨濟禅、黃檗禅の三つがある。曹洞禅を日本に伝えたのは道元禪師で、この流義「只管打坐しかんたきざは」を稱し、天地一枚ただ坐に徹する。黙照禅とも云う。

道元禪師の著「正法眼蔵」中の弁道話の一節に曰う

「宗門の正伝に曰く。この単伝正直の仏法は、最上中の最上なり。參見智識のはじめより、さらに焼香、禮拜、念仏、修懺、看經をもちいず、ただし打坐して身心脱落することをえよ。もし一時たりといふとも、三業に仏印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくざとりとなる。(略)

又仏法を伝授することは、必ず証契の人をその宗師とすべし。文字をかぞうる学者をもつてその導師とする

に足らず、一盲の衆首を引かんがごとし。(略)

真宗の人は禅といえよく道元を引く。これは仮名法語で書かれていること、同時代であること、多弁に論じていることなど、そこらが共通しているからではないかと思ふ。また真宗教義に近い道元の語録はよく引用される。その一つ

「まよいのいとふかき。大海の中に居ながら水なしと云わんが如し。すでにかたじけなく諸仏自受用三昧に安坐せり、これ広大の功德をなすにあらずや。

あわれむべし眼いまだひらけず、こころなお酔いにあることを。おおよそ諸仏の世界は不思議なり、心識のおよぶべきにあらず、いわんや不信劣智のしることをえんや。たゞ正信の大機のみよくいることをうるなり」  
ただ打成一片、ここに成仏の道ありというのが曹洞禅の本旨である。

臨濟禅は、臨濟義玄禪師によつて伝えられた禅である。

禪師は、師の黄檗布運禪師の会下で修行したが、最後に

「如何なるか仏法的々の大意」

と三たび問うて、三たび打着されたが、仏法そのものがわからない。遂に大愚和尚の所へ行つて法を求めた。大愚

「師衆に示して云く。

「道流、仏法は功を用うる処無し。祇これ平常無事なり。大便、小便、著衣、喫飯、困じ来れば即ち臥す。

愚人は我を笑う。智者は乃ちこれを知る。古人云く、外に向つて工夫を作す、総にこれ痴頭の漢、と。爾ただ随所に主と作れば、立処皆真なり。境来れども回換することを得ず。たとい従来の習氣、五無間の業あるも、おのずから解脱の大海となる。今時の学者すべて法を識らず、云々」

臨濟禅は、右のように鋭い宗風で、しかも「公案」を拈提して悟入見性させる所が曹洞とは違ふ。

臨濟は公案という問題を縁として、ここから仏法に導入する大悲の手段とした。所が公案は千七百則もあつて、それらを一つ一つ透つて、種々の迷いの微細なところまでも払滅し、併せて仏教智識をも身につけてゆく。

黄檗禅は念仏を以て公案とし、念仏と一枚になる三昧を得が、見性成仏となる。徳川時代に日本に隠元禪師によつて伝えられた。黄檗禅は聖道浄土の二門を総括した形の臨濟系統の念仏禅であり、臨濟の千七百の公案を透過する禅を称して「はしご悟り」と呵し、念仏禅こそ曹洞、臨濟に勝れた禅と拳示するが、宗風は微々として振わない。私見

は黄檗の所でどうだつたかと問う。臨濟応えて曰く、「仏法のぎりぐりの所はどうかと三たび問うたが、そのたびに打たれた」

と。大愚は黄檗を讃嘆して

「黄檗は親切なお方だなあー」

と。ここで臨濟は大悟徹底した。機が熟して仏に遭うた不思議な記録である。

この臨濟禅師の宗風は、何と問うても「喝」の一声をもつて答えた。師の黄檗はいかなる問話の人に対しても「棒」をもつて打ちすえるのみ。仏法はこうして、理性の限界外で授受される。

臨濟録に曰く。

「上堂して云く

「赤肉団上に一無位の真人あり。常に汝等諸人の面門より出入す。未だ証拠せざる者は、看よ、看よ」

時に僧あり出でて問う

「如何なるかこれ無位の真人」

師、禅牀を下つて把住して云く

「道え、道え」と。

その僧、擬議す。師は突き飛ばして云く

「無位の真人、是れ何の糞カスでもない」

と云つて、便ち方丈に帰る」

であるが、聖浄二門を総括して一大仏教を宗是とする浄土門の西山派(聖浄二門真実)も矢張り理論倒れて振わないのを見ると、仏教の大同團結は理論であつて実際ではない。人間の個性に相応した宗派が夫々求めに応じて現れたのだから、歴史的眞実をよく見れば、聖道も浄土もそのままに仏の眞実に証入することができる。

さて通仏教的に云えば、仏教は

「諸の悪を作すこと莫れ

衆の善を奉けて行え

自ら其の意を淨にする

是れ諸の仏の教なり」

という七仏通戒の偈が端的に示しているが、聖道門は、「悪を廃し善を修めて、自ら証入する。

そこに諸仏の眞意がわかつてくる」

となるが、浄土門はこれを逆に読むとこの偈がそのまま頂ける。

「まず諸仏の教を聞いて、その眞意に違ひ

その仏力によつて自然法爾のうちに、

廃悪修善が完うされる」

つまりこの偈を逆に読めば、親鸞聖人の「教行信証」と恰度合致することになる。禅を学んだとき、この偈の一番

大事な所は「自ら其の意を浄にする」の浄に徹底することだ。ここに善悪正邪はない、この転句の浄が大事だと日種讓山老師から聞いた。念仏においては、先ず教をよく聞き行信の南無阿弥陀仏一つに拳身満足して、その外に用がなくなるときに、この第三句目の浄が成程と思えたことであつた。

私は禅を求めてその真に触れ得ず、遇々業報のまにまに逆縁に遭い、禅では生き得なくなり、生活形式そのものが崩れてきた。生きる目的も失つたとき、不思議に、真宗親鸞会の御縁によつて「ただ念仏して」の一語に、好き人の導きをうけて万事解決がついたのが三十一歳の秋であつた。その後聖人の言葉、和讃、三部経、又は禅の語録たのが終生の公案となり、縁の熟するに従つて、その幾分の真意に触れる思いがする。信後相読の半生においては禅・淨いづれの仏語と祖意においても、交々あそうなのか、と思ふ節が時折ある。

「ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし」との好き人の仰せを蒙る。この念仏一つに全領されて文句のないところが不可思議の仏の加威力によるところ。縁は大悲であつたし、仏の成就し給うた念仏は、悲智円満の真実であつた。

芭蕉の語録

造化に随いて四時を友とす。  
見る処花にあらずという事なし、  
思ふ所月にあらずという事なし、

松の事は松に習え。竹の事は竹に習えと、師の詞のありしも、私意をはなれよという事なり。

○ 古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ。  
この道に古人なし。

○ 俳諧は三尺の童子にさせよ。初心の句こそたのもしけれ。

座右の銘

人の短をいう事なかれ  
己が長をとく事なかれ

物いえば 唇寒し秋の風

教えられることども

われとわれら

四月の下旬、横地様の御息が亡くなられたと聞き、早速お申聞いたしました。承りますと、先生には八人の御子様がありますが、男子はこの方お一人で、しかも名医大を三年前に卒業されて、横地医院の大切な後継者であられました。お一家の御悲歎は申すに言葉もありません。

数日後お書信を頂きました。その一節に、  
……この世で私が白井先生にお目にかかれたことをな  
んとも申しようもなくありがたいことだつたと、今度も  
痛感する次第であります。

もう一つ、私は今まで仏様は私ひとりを見守つていて下さると思つていたのでしたが、今度のことで私だけでなく、元(御長男)も、ともどもお見守りをうけていたのであつたことを知らしていただき、今さら私の浅薄を恥じ入るわけあります。私だけでなく、私どもであつたことをいただきました。……

花田正夫

横地様が白井先生にお遭いになつたのは、四十年も前白井先生が愛知医専の倫理学の教授として数年居られました頃で、先生の御宅での歎異鈔の輪読会に数回出席せられた由であります。

その後卅年、歎異鈔のことも忘れて居られた頃、大病せられ、自分の死ということに直面されました時、そのことを思い浮べられて、歎異鈔を改めて身読せられた時、南無阿弥陀仏が唯一のよるべであると氣附かれ、それから十年も、念仏生活を続けて来られました。

そして「今度も」とありますのは、人の親としての最大の御不幸を縁として、よき人にお目にかかつていたことの有難さを痛感せられたのであります。

次に、御長男の死をとおされまして、「私だけでなく、私どもであつた」と氣付かれましたことの慚謝の言葉が述べてありますことを、身にしみて味わせて頂きました。

それにつけても思い併せられますことは、白井先生



は青年の頃御母堂を亡くされ、そこに「天なり、命なり」という儒教にやすらぎ得られず、聖書を読みはじめられたが、信する者の救いはとかれてあつても、すでに亡くなつた方の救いは見出すことが出来ず、その問題をもつて、三好愛吉博士をおたずねになつて、仏教に入れ、歎異鈔の中に、その一切の救いのあることを知られて、念仏一道にまどかなやすらぎを得られたとのであります。

近角常観先生は御子達を教育された根本に「自分をお見捨てない仏が、子供をお見捨てになる筈はない」という確信を持つていられた由、近角常音先生から承り、今なお耳の底にとどまつて居ります。

私一人のすくいが、同時に私ども一切人の救いであり、私共一切人のすくいが、そのまま私一人のすくいであります。

釈尊は、父を殺し、母を苦しめた、悪逆の子、阿闍世王の救いを念じられて、

「阿闍世のために涅槃に入らず」

と述懐せられました。そして更に、

「阿闍世とは、煩惱具足の一切凡夫、五逆をつく

精神作用もおとろえて行きます。まことにあじぎないかぎりでありませぬ。このわが身も心もたよりないことをかねてから見抜いて下さつて、金剛の力をもつて向つて下さる仏のお真実一つがたのみであります。

しかし身心共におとろえては、たしかな仏もボンヤリとする、これは万人のまぬかれぬことであります。ここで一つ聞いて頂きたいことは、お母さん／＼と慕いよる子も可愛いに相違ありませんが、その子が病重く高熱にうかされてウワゴトばかり言うようになった時、親の悲心はキリキリ舞いをして子供を看護するのであります。今三世にわたる久遠のみ親の仏の悲心は、今こそ切々と涙をそいで下さるのであります。正信偈に、煩惱に眼さえられて、攝取の光明を見たてまつらずといえども、大悲倦きことなくて常に我を照したもう、とありますのも、そのことであります。盲人は親を見ることが出来ませんが、親はこの盲者を常に照し護つて下さるのであります……」

「そうお聞かせ頂いても、その仏様が……」との切迫したおたずねでありました。そこで

「子を持つて知る親の恩と昔から云いますが、親の心は親になつて始めて知れはじめるのであります。仏を知るには仏と同じさよりの智慧がなければなりません。然し

る者なり……」と説かれてあります。阿闍世一人のための大悲が、そのまま私共一切凡夫のための大悲であると知らされるのであります。

聖人が「親鸞一人がためなりけり」と感佩して下さる大悲は、そのまま、わが御身に掛けて、私の救いをあかして下さることであり、同時に私ども一切人の救いがそこにひらかれるのであります。

横地様の御長男の死という悲涙に宿る、如来の自利他利の無碍の慈光を拝し、拈香合掌させられました。

### 眞実 は 名 告 る

二月の初旬でありました。かねてから親交を得て居りました、某師の奥様が病重く、是非会いたいとの報せをうけ早速病床をお訪いしました。

就床以来すでに半年、腎臓病がすゝみ、心臓もおとろえていられる御様子。御見舞を申して枕頭に坐しますと、

「段々体力もおとろえ、記憶力も消失して、かつて聖語などを思い浮べて喜んで居りましたのが、それもみんな駄目になりました。只今では仏様までがボンヤリとなつてしまいました……」

との訴えでありました。

「私共この不完全な肉体を持つ者は、病気の衰弱と共に

この仏智は、たとえ奥様が健康になられ頭脳の働きがよくなられても煩惱の雲に覆われて、盲目の身をどうすることも出来ません。

ところがこの私共の愚痴無智の姿を知りつくされた仏は南無阿弥陀仏の名号となつて、私共にあらわれて下さるのであります。私共としては、この南無阿弥陀仏を外にして仏にあう道は絶無であります。仏が南無阿弥陀仏とあらわれ〃心配するな、ここに居るぞ〃と名告り出て下さるのであります。ただ念仏して弥仏にたすけられるばかりであります……」

すると不思議にも、念仏と共に微笑されつゝ、「こうして承ることもやがて忘れて行くことでしよう、そうしたことで述べられるに及んで、再会を期してお別れしました、その後十日ほどして念仏の息が絶えられました。

私はこの奥様の、捨身の問いによつて、阿弥陀仏が、大悲を西方にたれて、南無阿弥陀仏と名告り出て下さることの有難さを見じみと仰がせて頂きました。

### 白 秋 の 嘆 き

北原白秋がある日その家の前で、野菊を持つた少女に会つた。

「まあきれいですね」

とほめると、少女はその花を白秋の手に渡して、  
「あげましょう」という……。

白秋は、その花の美しさよりも、少女の純真な心をうれしく思い、

「ありがたい。とてもきれいですね。またとれたら持つて来て下さい。いいものをあげますから」

少女は喜んで帰っていった。翌日、少女は約束どおり花を持つてきたので、あり合わせのリンゴを一つやつたら、また大変よろこんで帰った。

白秋はその後姿を見て、とても悲しんだ。昨日の少女と今日の少女ではすっかり変つてゐることであつた。それは自分が大人の考えて「いいものをあげますよ」といつたことで少女の純白な心をよごしたことの後悔であつた。

その翌日には少女は二人連れで来た。またその次の日は四人になつた。そして少女たちの態度は日増しにわるくなるので、耐えられなくなつて、白秋が

「もうたくさんですから、またすこしたつてから」とことわつた。少女たちは

「もうたくさんだよ」といふて帰つていつたが白秋はその少女の口ぶりに、大きな衝撃を感じた。

「こんなにまで子供の心を醜いものにしたのはだれなんだ。自分の心の片隅に、そういう醜いものがあるからこ

それは、学者、物識りをほこるソフィスト学派の人々に對して、「真知は無知なり」と説いたソクラテスの心にも通うものがあり、又、文明が進めばすゝむほど乱れていくフランスにあつて、「自然に帰れ」と叫んだルソーの心にも通じると思ひます。

さもあらばあれ、太陽が出ると、電灯も、ロソクも、油灯も皆いらなくなつて、天地一杯の明るさの中に暮すことが出来ますように、仏の智慧の光明の照護のもとに、おのが智慧も、才覚も無用のものとなつて、かるがろとした自由のめぐみを仰ぐことの有難さ、申す言葉もつきることでありませう。これみな、念仏の智慧の自然の徳光であります。

親鸞聖人の八十八歳の御法語、「自然法爾章」の終りに、

よしあしの文字をもしらぬひとはみな

まことのころなりけるを

善悪の字しりがおに、おおそらごのかたちなり

是非しらず、邪正もわかぬこの身なり

小慈小悲もなければも名利に人師をこのむなり。

とありますことは、甚深微妙の味のあることで、そこに尽十方の無碍の光照のもとに浮ぶ、老聖人の微笑を拜す

んなことになるんたろう。もし自分の文章や歌にも、そんなものが潜んでいたらおそろしいことだ」と。

これはある高校倫理の教科書に引用されたものの略述であります。私自身が、限りなく濁つた心から、人の心を傷つけ、汚し、痛めていることあまりにも多いのをまさきと知らされ愧じ入つたことであります。

### 虚にして往き実にして帰る

老子の弟子、荘子の言葉であります。うつわにものが一杯はいつていると、もう何も入りませんが、空虚であれば何でも容れることが出来ます。又両手に一杯物を掴まえていては何物も持つことは出来ませんが、空手であれば何も自由に持つことが出来ます。

「虚にして往き、実にして帰る」とは、老子の虚無思想をうけた荘子の名言として、二千余年間、伝えられてきたものであります。

老子の虚無思想を非常に危険なものと一部に伝えられますが、それは老子の目にうつる世相、争い、殺し、だます、そうしたことの限りなく続き、且つくりひろげられる世に、なお赤児の微笑の美しさの残るのに驚いて、人々に小賢しい智慧や、物知り顔の慢心をすてて、赤児の心にかえれとの切な願ひでありました。

るのであります。

### 良寛師詠

たちちねの母が万国と朝夕に 佐渡がしまへをうち見  
つるかな

天も水もひとつに見ゆる海の上に 浮び出でたる佐渡  
が島山

山かけの石間をつたう苔水の あるかなきに世を渡  
るかな

てにさわるものこそなければのりの道 それがさながら  
それにあるせば

はもみちば 秋

新池や蛙とびこむ音もなし

平生の身持にほしや風呂上り

病篤かりし頃

裏を見せ表を見せて散る紅葉

みちひとすじ

山内 すす

……今日は大変横着な、御迷惑なお願いで御座いますけれど、御法について、今日まで私の味つて参りました道筋をお聞き下さいまして、間違つて居るところは、飛び上る程キツク御叱り下さいますよう御願ひ申し上げます。

私は児玉という名古屋在の仏法繁昌なところで、少し好人物で、理屈もなく喜び、低い声でいつも御念仏をとなえて居た人を父とし、勝気で、あゝだ、こうだと理屈をならべながらも、よく参つて居た母から生れました。

それ故、小さい時から、仏様にお参りせねば御飯は食べられぬもの、貰つた物や、初物はお供えせねば頂かれぬものとしつけられて幸に育つて参りました。

七つの春たと覚えて居りますが、村の弘法堂のお爺さんが亡くなり、村の禪宗寺へ土葬されましたが、其様子をじつと見ていた私は、氣の毒で仕方がありませんでした。その晩、昔のこととて暗い便所の中で、そのことを思い出し、死ぬのがいやで、悲しくて、「あゝして土の中に居るのか、それからどこへ行くのか」と泣けて泣けて仕方な

俗傳を問はず、高田派大谷派、本願寺派を問はず聞きま

した。この頃は分つたところに御助がある様に思い、もうお助けにあずかつた事と一人で喜び、安心して居りました。然し光明のお照らしにあいませんで、我悪機が見えず、したがって慚愧の思いも無く、法のみ仰いで、そらよろこびを返して居りました。

この頃、江川町の市野さんと云われる、あらゆる経本を讀みつくして、ついに念仏の人となられた方から、よく聞かせて貰いました。この方が云われるには「御文様は御文面通りに頂いたら大変な自力になつて了う。よく御心を頂かねばならぬ」と申されたので、それ以来おそろしくてならずどきり／＼としてきて居りました。

その頃「信者めぐり」の主、三田源七、という、全国の名僧、信者に聞き歩いて、信をとつたという方が、新道町へ見えましてので、市野さんについてお参りしましたところ、

「美濃のおゆき同行を尋ねた時、別れぎわに、これで信を得た、もうよし、というようなものが出来たら、如来、聖人と御縁が切れたと思えと云われた」

と話されました。私はわかりかねてホカンとして居りましたところ、市野さんが「このお味いが分らん様なことで

く、母に尋ねましたところ、母はじつと私の顔を眺めていました。が、「お前はきつと宿善のある子に違いない、念仏をとなえよ、明日からはお参りに連れて行つてやろう」と申しました。

それからはいつも連れられて行きました。それでも農家の事とて、忙しくて母の参れぬ日は、一人で行きました。又、わからぬながら仏前にじつと座つて居るのが嬉しく、お参りの時いい着物を着せて貰えるのも嬉しく、御座の誰彼が、小さいのにようまあ一人で、とほめてくれるのも嬉しく、十二、三の頃にはどうにか一応の筋道は分り、母と話し合いました。思えばこうした母の御手引があつたらこそと思ひ出しては喜んで居ります。

十八歳の五月、縁があつて、新川の仏の助左工門と人に云われた厚信の家へ嫁ぎました。主人と性格は合いませんでしたが、聞法は氣持よく出してくれましたので、店のひま／＼に聞かせて貰いました。

晩年の母は「仏法は広く聞け、人につくな。御言葉につくな、根本を聞け」と申しましたので、それが肝に銘じ、は、他力はいただけで居らん」と云われましたので、さあ今まで覚えて固めて居た安心が一度にくずれてしまいました。

それからは何も手につかぬ程苦しみました。忘れもしません、父の三回忌の前晩でしたが、「たのむ一念」が心配になり、店を片付ても寝る氣にもなれず、じつと座つて居りましたら、空中の、店の大時計のそばから、父の声で、「今お浄土で頭を上げたらお前の苦しんで居る姿が見えて直ぐ来た。頼む一念はお前の仕事でなくて、お恵みの念仏の中に、頼む思いも、助かる法も、入つて居るぞ、只お受けする計りた、早くいただけよ」

と教えてくれました。踊り上つて氣遣のように喜んだ私は、それから又いい氣になつて居りました。すると程なく病氣になりました、今度は出掛けねばならぬと、我機をじつとながめたら、それは／＼真闇でした。こんな筈はない、御仏はどこにみえるのかと探しましたが、真闇でした。泣きつ、叫びつ、二三日しますと、どこからともなく「必ず助くる」と、御呼声が聞えて来ましたと同時に、今迄わからなかつた我心の悪さをすみ／＼まで照らし出され、おそろしくて仕方がありませんでした。

こんなことではと後さがりをしてみたり、少しはよくなろうと一生懸命つとめてみましたが、すこしも善くはなれ

ず、随分苦しみましたがお陰様でだんぐの御念力により、悪い機様の見えるたびに「こんなものを」と、お念仏のもとに帰らせて貰い、細々ながら喜ばせていただく身にして頂きました。

そのうちに大戦争となり、終戦となり、門前町に移りましてから西別院が近いので、日曜の度に参らせて貰い、種々聞かせて頂き、一言々々がよく胸に沁みこみました。或日、御同行の一人が「この本を読みなさい」と勧めて下さったのが『慈光』でした。毎月楽しんで読んでいるうちに、池山先生の、あの有難い

一心正念直来、オネガヒダカラスグサテオクレヨ、がのつて居りました。あの時の嬉しかつた事は申上げられませんが、「これが聞きたかつた」と本を持つてどび上りました。

それからこの仰せが胸一杯にふくらみ、今迄聞いた有難い御言葉がだんぐと消えて参りました。それと反対に、悪業の減り目はなく、信の生活とは思えぬ様な見苦しい日ぐらします。

人様は浄土往生が嬉しいと云われますけれど、私はこんないやな病気の根性の悪い者も、愛相もつかされず、そばはなれずに御付き添いづめの現在のの守護りが嬉しゆう御座

### 瓶中の影

長者があつて、新妻を迎えて平和に暮して居りました。或日長者がその妻に、厨房から葡萄酒を取つて来るように命じました。ところが妻が瓶を開けて見ると、そこに自分の影がうつつているのを見て、それが自分の姿とは知らずに、主人はこの瓶に女人をかくしていると思ひ、非常に腹つて、

「貴方はさきに婦人を持つてこれを瓶の中にかくして、更に私を妻に迎えたのはどうしたことですか」と。主人は自分で厨房に入つて、瓶を開いて、そこに自分の影を見て非常に腹を立て、そこに男子を蔵していると疑い、互にいかり腹を立てて、自分の見た影を突としてはげしい争いを続けました。

長者と親しい友達があつて、二人の争いのわけを聞いて早速瓶をのぞくと、また自分の影を見つけ、この中に他の親友をかくして、自分を偽るために争うと見せているのだと思ひこんで恨んで見捨てて去りました。

又一人の比丘尼が居り、かねてから供養をうけて居りましたが夫妻の争いを聞き、一大事とはかりとんで来てその

います。

長い病気の身とて、気持のよい日はすくなく、あそこ、ここが悪く、ペシヤンコになつて了いますが、念仏に立ちかえらされては、み仏も共に苦しんで下さる御守りがあればこそ、このくらいで済まされて下さると気付きますと、大変勇氣が出て、辛棒がし易くなります。そのうちに苦が薄らぎますと、又元の朗らかさに帰り、好きな歌を唱つたり、テレビを楽しんだり、時には別院へ出かけたり、幸福な時を過します。

こうして一日一日と受けた業報をはたさして貰つて居りますが、もうこの頂いた生命もそう長くはないと思つて居ります。息が切れれば、御仏がいい様に計らつて、さとの国へ生れさせて下さる事よとおまかせ申して居ります。長々と至らぬ文筆にて申上げましたが、到つてあわて者の愚か者の私でございます故、間違つて居るところは、何卒きびしく御意見下さいませ。かしこ。

わけを聞き、また瓶の中を見ると一人の比丘尼が居るのを見て、これも腹を立てて去りました。

ところが一人の得道の人があつて、これをみて、それは影に過ぎないことを知つて

「世人のよくもここまで惑うていることよ。瓶の中に人が居るといふが、自分はその人を出してあげよう」と云つて、大きな石を打ちつけて瓶を破つて、そこに何も無いことを知らせました。

仏はこの諭をとかれてのちに、

「三界の人はみな仮りのこの身を知らないで、食欲を起し瞋恚を為し、邪見を抱いて、日夜悪業を造つて、生死の海をはてしなく流転しているのはこの通りである」とさとされました。

(雜譬喻経)





## あとがき

麦秋もすぎ、初夏の陽ざしの眼にしみる頃となりました。二月以来おくりていました本誌もようやく余定通りに発送出来るようになりました。印刷係の方々にも色々御苦勞おかけしましたが、読者の方々へも御心配おかけいたしました。おわびとお礼を申し上げます。

昨年頃から「人造り」ということがしきりに言われますが、一つの時代とか、主義に順応出来るような、型にはまつた人造りであつてはならぬと思います。明治時代には、国家の目的は富国強兵、個人の理想は立身出世でありました。その結果、戦争から戦争となつて、遂に大惨事と歸しました。

猫の目のように転変する時代ではあります、人間そのものは頭は一つ手は二つ足も二本であることに変わりはありません。この万古不易の地盤に立つて、時代に即応する道も自然にひらけることでありましょう。人間性の本質を深く見つめて、各々がそのところを得

しめるといふ大道を共に歩みたいことでもあります。  
「道は太古に通じて、日々に新なり」の古語が雄弁にその消息を語つてくれます。

○福島先生は益々御健勝にいられます。四月から北里大学の教職課程に専任、それから京浜女子大学に兼務せられ、その上に十年來の日本獣医畜産大学も統講せられるというまことにお忙しい御生活であります。秋には御來講頂けます由承り、およろこび申して居ります。

遠き日のむかしの人のおとづれをなつかしむかや老の此の身は 福島先生詠

○榊原さんの原稿は、愛媛大学での仏青大会での記念講話の骨子であります。禅一筋を辿られて遂に不徹と決し念仏一道に安らぎを得られての禅と念仏の所感を語られました。現代に禅か念仏かということが日本仏教の二目標になつて居りますが、身をもつてその答えを出されたものであります。

○近角真観様はまた北海道に急に御赴任の由承りました。炭労問題についてまことに席のあたたまることのない縦横無尽の大活躍であります。御健康を祈念して居ります。

## 御案内

毎月第一、二、三日曜、午後一時半。真宗講話会。南区敷上町二丁目八八。一道会館。  
毎月廿四日午前午後、法話会。昭和区小桜町、教四寺。

定 価 一 部 二十五円 (送共)

半 年 百五十円 (送共)

一 年 三百円 (送共)

名古屋市南区敷上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区敷上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番